

# 高校生の部落問題に関する意識調査の分析

## 第二報 クロス集計から明らかになったこと

部落解放研究所 中・高部会

### はじめに

大阪府立高等学校同和教育研究会(以下府高同研)は、昨年に引き続き高校一年生について部落問題の意識調査を行った。この調査を行った主たる目的は、前回の報告(「部落解放研究」二四号・八一年二月号)に記載されている通り(「末尾資料1」のうち註1)、各高校現場が自分の学校の生徒の意識実態を、府下の高校生一般との比較に於いて把握出来るようにすることにあるが、府高同研自体としても、高校の同和教育を推進する上での問題点を発見し、対策を練るための手がかりを求めていたからである。ただ前回は初めての試みであったので、調査項目に検討不十分な点があったり、集計・分析の体制も不備だったりしたため、調査の標準性という点では目的を達したものの、本来の目的である部落解放の教育の推進策を研究する資料としての価値は充分とはいえなかった。今回は昨年の調査に当って、各現場から寄せられた批判や提案

### 集計方法について(解説)

ア、一次集計(回答別百分率)  
詳しくは前回の報告で述べているが(註2)、調査範囲の中の「学校の特質」別分布が府立高校全体のそれに似ていれば、学校別集計(平均値)の平均と、市町村別集計(平均値)から求めた平均とが、よく一致することが明らかになっているので、今回は調査に協力頂いた学校の中から、学区毎の生徒数に対比させて、前記の特質分布を考慮して一〇〇学級を選び、マークシートに転記したものを標本とした。有効だった標本数は四三二四名である。

### Ⅰ、部落の初期認識をめぐる諸問題

#### (質問①～④)

イ、二次集計(特定集団毎の集計)  
標本全体の中から例えば「部落のことを近親者から知った者」とか、「学校・本などの公的媒体から知ったもの」といった具合に、アンケートの中の特定の選択肢に答えた生徒群をえらび出し、その群ごとに、例えば「初めてその事を知ったとき、どう受けとめたか」という質問への答え方の差を知るとか、あるいは中学校での同和学習量の質問に対する回答別に生徒をくくって学習量階層をつくり、各階層別に他の質問に対する答え方に差があるかどうかを調べるなどの手法が二次のクロス集計である。この場合、くくった群の標本の数が全体に対して(一次集計の必が)小さすぎると誤差が大きくなるから、適当な大きさになるまで近似した群をまとめて計算した。

### 本報告文の構成について

昨年と今年のアンケート項目には若干の改良はあるが、かなりの部分は共通しており、調査対象も同じく高校一年生であるから、回答別百分率(一次集計値)も当然似たものになる。この文の末尾に「資料2」として昨年と今年の一次集計の比較をつけたのでそれを参照して頂きたい。本報告の主たる内容は副題の通り「クロス集計から明らかになったこと」であるので、特に必要な場合を除いて一次集計の分析は記述していない。ただ前回の分析のうちの特に必要な部分(比較して考える方がよいと思われるもの等)を「資料1」として再掲してあるので参照願いたい。

に基づき、調査項目等に若干の改良を加えた他に、科学教育センターの御協力を頂き、コンピューターによるクロス集計(回答相互間の二次集計)により、集団毎の傾向や、集団間の相関関係も明らかにすることが出来たので、その中から主要なものを紹介し、部落解放の教育研究の推進に役立てたいと考えてる。

調査では最初に次の四つを尋ねている。

- 質問① 部落のことを初めて知った時期。
  - 質問② その事を知った情報源。
  - 質問③ その時どう思ったか。
  - 質問④ 今ではどう思っているか。
- 質問①の認識時期と質問③の初期印象とはどんな関連があるだろうか。また質問②の情報源とはどうだろうか。さらに質問③の初期印象と④の現在印象との関係はどうだろうか、これらの事を明らかにし、さらにその上で私達の提起も試みたい。

#### 1、認識時期による印象差

(表1) 部落のことを知る時期と印象との関係

印象	時期		中学時代
	小学校時代(低)	小学校時代(高)	
1. 気の毒	24	28	27
2. ショック	8	6	6
3. 腹が立った	12	14	13
4. こわい所	5	5	6
5. 関係ない	6	6	8
6. しかたない	1	2	2
7. よくわからない	*45	39	37

認識時期区分毎の一次集計は資料2の通り「小学校高学年」が46%(昨年48%)で断然多く、それより早い「小学校低学年」17%、それより遅い「中学時代」22%が、その両側に集団をつくっている。この集団ごとの印象を(表1)に示す。\*印の「よくわからない」

次に調査は部落問題関係の知識や学習内容さらには、それに対する感想・要望を尋ねている。そしてこれの質問の中間(⑦・⑧)で学習量や、『にんげん』の使用状況を問うている。前者(知識や感想)が後者(同和教育のうけ方)とどんな関係にあるのかを以下、明らかにして行きたい。

II、同和教育量をめぐる諸問題 (質問⑤)~(⑪)

以上みて来たように、私達はIの1の段階では同和教育を開始する時期を早くすることも、遅くする事も任意であるとの判断だったが、Iの2、3の分析を含めて考えるならば、初期印象(早期の教育)を公的媒体(学校等)によって同情的に(反差別共闘の方向で)与える事が、部落解放に役立つ人を育てる上で有利であるという結論を得た。これはすでに解放教育の定説であり、『にんげん』教材として実施に移されていることの追認であるが、今回の調査は「定説に対する懐疑」が無用であることを明らかにしたといえよう。

4、まとめ  
以上みて来たように、私達はIの1の段階では同和教育を開始する時期を早くすることも、遅くする事も任意であるとの判断だったが、Iの2、3の分析を含めて考えるならば、初期印象(早期の教育)を公的媒体(学校等)によって同情的に(反差別共闘の方向で)与える事が、部落解放に役立つ人を育てる上で有利であるという結論を得た。これはすでに解放教育の定説であり、『にんげん』教材として実施に移されていることの追認であるが、今回の調査は「定説に対する懐疑」が無用であることを明らかにしたといえよう。

(表3) 同和学习量

回答 選択肢	%
1. ぜんぜん習わなかった。	19
2. 年に3~5回習った。	47
3. 1ヶ月に1回ぐらい。	15
4. 週に1回ぐらい。	15
5. 週に何回もあった。	3

(表4) にんげん使用状況

回答 選択肢	%
1. そんな本知らない。	3
2. 配られただけ。	28
3. 1~2回使った。	46
4. よく使った。	23

1、この章で扱う「学習量」の表示等については、調査の質問⑦の文言は「部落差別など人権のことについては、中学時代の3年間平均してどれくらい習いましたか。」というものでそれに対しての回答は(表3)の通りである。同和教育の量との関係を見るに当り、以下の各節では、この学習量の選択肢をそのまま段階表示に用いたい。(ただし、No.5、は実人数で百十二名に過ぎないので使わない。)  
また質問⑧では『副読本』に「にんげん」はどのように使いましたか。」と問い、その結果は(表4)の通りである。『にんげん』使用状況については、上記のNo.1と2を「不使用」とし、No.4を「使用」として表わすことにする。  
さらに表や図による表示についても、特徴的なものだけに止めた方が理解しやすいと思えるので、たとえば知識項目(質問⑥)

次に調査は部落問題関係の知識や学習内容さらには、それに対する感想・要望を尋ねている。そしてこれの質問の中間(⑦・⑧)で学習量や、『にんげん』の使用状況を問うている。前者(知識や感想)が後者(同和教育のうけ方)とどんな関係にあるのかを以下、明らかにして行きたい。

II、同和教育量をめぐる諸問題 (質問⑤)~(⑪)

以上みて来たように、私達はIの1の段階では同和教育を開始する時期を早くすることも、遅くする事も任意であるとの判断だったが、Iの2、3の分析を含めて考えるならば、初期印象(早期の教育)を公的媒体(学校等)によって同情的に(反差別共闘の方向で)与える事が、部落解放に役立つ人を育てる上で有利であるという結論を得た。これはすでに解放教育の定説であり、『にんげん』教材として実施に移されていることの追認であるが、今回の調査は「定説に対する懐疑」が無用であることを明らかにしたといえよう。

4、まとめ  
以上みて来たように、私達はIの1の段階では同和教育を開始する時期を早くすることも、遅くする事も任意であるとの判断だったが、Iの2、3の分析を含めて考えるならば、初期印象(早期の教育)を公的媒体(学校等)によって同情的に(反差別共闘の方向で)与える事が、部落解放に役立つ人を育てる上で有利であるという結論を得た。これはすでに解放教育の定説であり、『にんげん』教材として実施に移されていることの追認であるが、今回の調査は「定説に対する懐疑」が無用であることを明らかにしたといえよう。

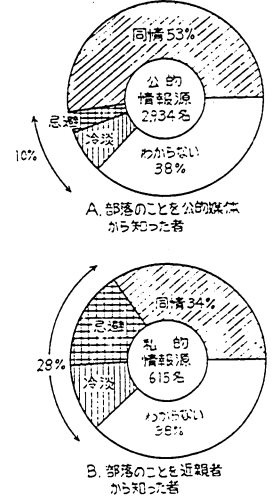
たに有意の差がある他、同和教育の開始時期が印象に与える影響はないと断定できる。  
2、情報源群による印象差  
質問②の情報源は1~10、の選択肢で回答を求めているが、そのうちの1~5、は父・母・その他の家族・近所の人・友人といった私的媒体であり、6~9、は、先生・テレビ・本・府市の広報誌といった公的媒体である。そこでこの二つの媒体群ごとの、生徒に与えた印象差を(表2)に、さらに印象の方も三つのグループにまとめて(図1)に示す。なお10の「だれからもなく」の集団は内容的には「私的媒体」であることは推理できるし、実際上、数値も「私的媒体」と酷似していたが、この集計からはあいてある。

(表2) 情報源別印象差

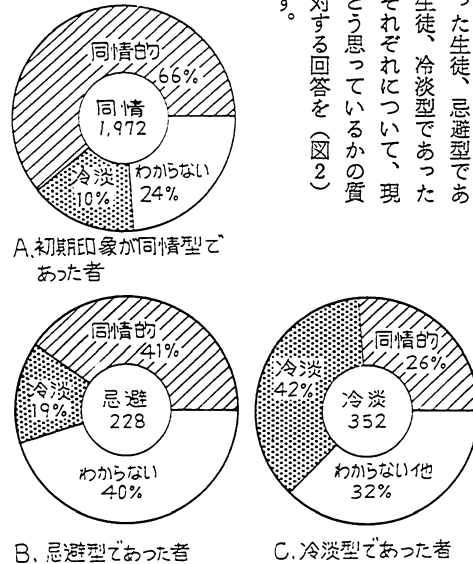
		情報源	
		公的	私的
同情型	1. 気の毒	31	18
	2. ショック	7	6
	3. 腹が立つ	15	10
忌避型	4. こわい所	3	*18
冷淡型	5. 関係ない	6	8
	6. しかたない	1	2
	7. わからない	38	38

(図1) から明らかのように、私的情報源は子供たちに部落をゆがめて伝えている。さらに(表1)の忌避型だけについて見れば、私的媒体の流す情報の害毒は六倍であるといえなくもない。

(図1) 情報源の影響

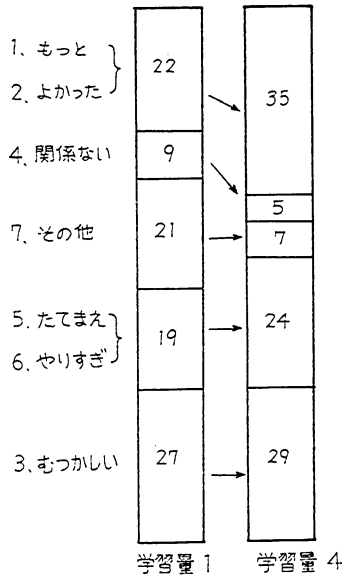


(図2) 初期印象別の現在の感想



3、初期印象の意味  
初期印象が同情型なものであった生徒、忌避型であった生徒、冷淡型であった生徒それぞれについて、現在はどう思っているかの質問に対する回答を(図2)に示す。

(図6) 同和教育の感想 (学習量別)



同様な調査であるが、質問③として中学校で学習したテーマを尋ねた結果を(図5)に示す。

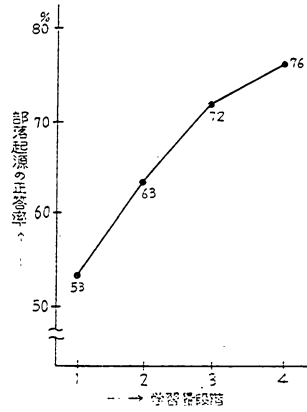
これによると、憲法・人権とか原爆・平和のテーマはすべての生徒が中学時代に学習しており、部落問題や反差別のテーマについては、生徒の間に高校入学前の学習歴に大きな差があることが明らかになる。高校の同和教育のむづかしさの一因として挙げられていることではあるが、部落問題について先進的な生徒を核にしたグループによる自主活動などが研究されなければならない。

3、生徒たちの同和教育に対する意見

次に生徒たちが中学校で受けた同和教育に対して、どんな感想をもっているかを尋ねた質問④の結果を(図6)に示す。

まず中学校の同和教育についての肯定的感想(選択肢1と2)が、学習量の多かった生徒は多いこと、それと相補的に、4の「自分とは関係ないこと……」と思っている生徒が約半分(64%)

(図3) 学習量と政治起源説選択率



や、学習項目(質問⑤)などについては、調査の際の、回答選択肢の順序とは関係なく、共通傾向にある回答群を一括して表示させて頂くことを始めにお断りしておく。学習量などについて生徒が正確に記入したかどうかとも疑えば疑えるが、最低15%の階級についても六二九名もの生徒の証言であることを考えて、そのまますお伝えする。

2、同和教育量と知識・内容との関係

(図3)は部落の起源については「政治起源説」(選択肢No.2「封建時代に幕府が民衆を支配するついで作った」)を選んだ生徒の各「同和学習量」段階群の内部比率で示したものである。

(図4)は学習量と知識の増え方の関係である。

(図3)・(図4) いづれからも、同和教育の量の増加に伴って知識が増すという当然の結果が出たが、(図4)では、教育量に比例するものと、そうでないものとの二種類あり、義務制校の同和教育の力点が浮彫りになった。

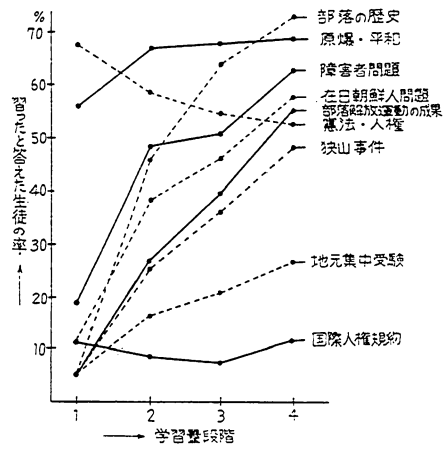
約44.5%) しかないことに注目したい。このちがいは数量的には大きいものではないが、解放教育に携わる中学校の教師たちの真の成果と考えたい。「冷談型」の初期印象が変わっていくことは、先の章で明らかであるから、「感性的教育」の困難さを乗り越えた努力をまず評価したい。

次に「やりすぎ」も学習量と正の相関があるが、比率を考えれば妥当なところである。問題にしたいのはあわせて43~44%におよぶ内容批判が、学習量と相関をもたない点である。この選択肢の文言は昨年のもとは異っているが、昨年の「たてまえばかりで効果がなかった」39%が、今年の3と5に対応すると考えられる。7の「その他」に大差があるので決定的なコメントは出ないが、「たてまえばかり……」という批判の根強さと共に、学習量の多かった生徒たちの「むづかしかった」の中味は、中三段階で取扱う「解放運動史」のむづかしさではなからうかとも考えられる。これらの点は中学校同和教育の大きな研究課題である。なお(註3)も比較されたい。

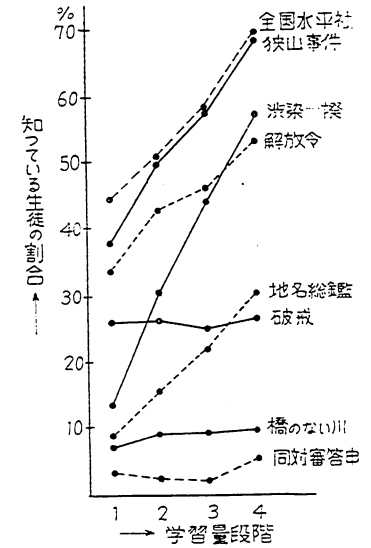
次に高校に対する要望をみてみたい。(図7)に調査結果を示す。

中学校での同和学習の不充分だった生徒は部落史を、学習の進んだ生徒は解放運動をと、関心が移行している。また同様に、部落問題学習の進んだ生徒(図5)「学習量と内容」を参照)は次に部落問題以外の人権問題の方へ関心が移行していく傾向も認められる。調査をまっまでもなくだいたい推理できる事ではあるが、このような推理が統計で裏打ちされたことは、それなりに価値

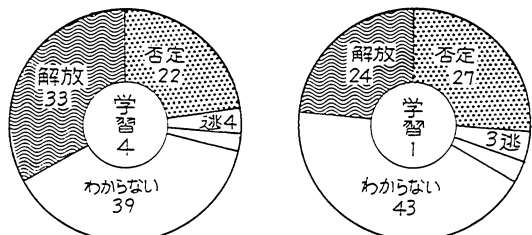
(図5) 学習量項目



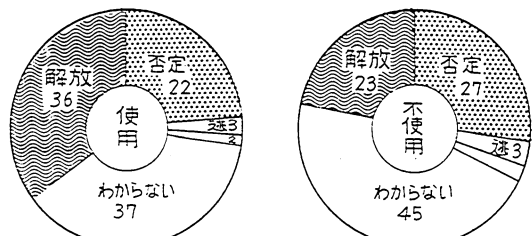
(図4) 学習量と知識



(図10) 教育量・手段と差別に対する態度



ウ、同和学習量の大(4)小(1)と自分の態度



エ、「人んげん」使用、不使用と自分の態度

下段の「にんげん」使用状況の方が相関が強いことが解る。しかし重要なことは、上段・下段いずれにせよ、これらの相関は予想したほどには強くない事と、私たち教師の前には「わからない」とか「答えられない」生徒が40%ほどいる事実である。この質問は先の報告でも触れたように、部落解放同盟大阪府連合会教育対策部長の山中多美男氏が提起し、府高同研の検討を経て行ったものであるが、氏のいわゆる「感性の教育」は、ただ単に同和教育の量を増やすよりは、例えば「にんげん」使用とかが有効である

IV、生徒たちの判断と志向傾向 (質問⑬・⑭)

(表5) 知識の正しさと「態度」

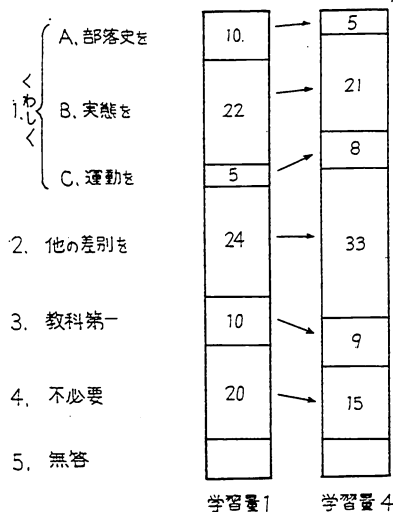
態度	知識	部落の起源について	
		政治起源説を答えたもの	その他の説を答えたもの
解放		30	27
否定		23	28
逃避		3	3
わからない		41	40
無答		2	2

が、それだけでは部落の解放に対する寄与は極めて少ないということがいえる。

り、さらに「わからない」の多数の生徒たちをゆり動かすには、同和教育の方法論研究開発が必要であることを示している。この質問(仮りに「態度」とする)とたとえば部落起源についての知識の正確さとの関連を(表5)に示す。ごらんのように有意の差は見られない。知識を教える事も同和教育である

この後、この調査では前回と同様、質問⑩として「部落解放の有効対策」を二つ選ばせている。前節の「解放型」と「否定・迷

(図7) 高校の同和教育への要望(中学での学習量別)



値があったと思いたい。

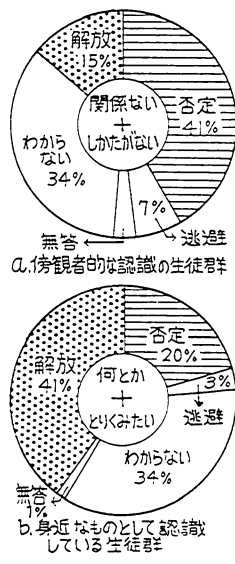
III、感性教育へのアプローチはあるか。

(質問⑫)

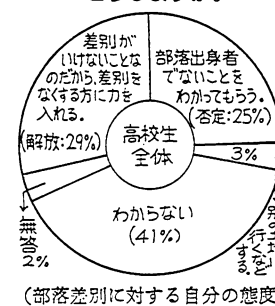
部落差別を自分の問題としてとらえているのかどうか、もし自分の問題ならどうとらえるのか、同和教育の根底はここから始まる。(図8)に本調査の質問⑫の結果を掲げる。さらにこの調査を先に記した質問④「部落についての現在の感想」で異なった応答をした生徒集団別に示したのが(図9)である。

この(図9)の上と下とで「解放の努力」と「否定の証明努力」との比率が全く逆になっている事は、内容的な「正」の強い

(図9) 部落の現在認識と自己の態度



(図8) 質問⑩もしもあなたが部落の人だと思われたり、知られたりしたらどうしますか。



相関関係がある証明であるから、生徒はかなり正直に「本音」を答えてくれたといえるし、同時に、他の質問との関連の分析に用いるデータであること示している。そこでこの調査を、質問⑦の「同和学習

遊型」の集団別について示したものが(表6)であり、それぞれの「型」の生徒のえらんだベスト三を(図11)に示す。ただし選技肢の文言は要約した。

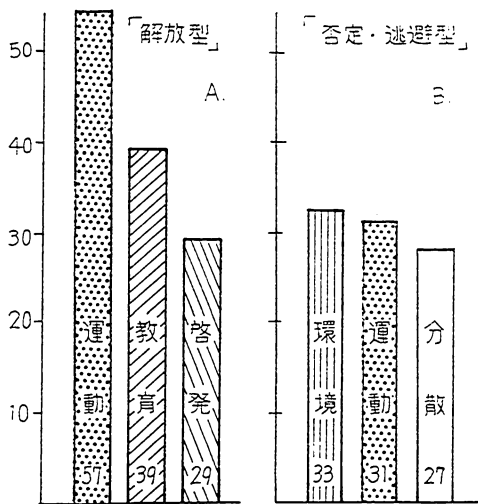
図のA、Bはいずれも大阪の各学区の高校生からなる約一、一〇〇人ずつのグループがえらんだ。Aは「三大スローガン」であるが、質問⑩の回答で仕分けたグループが、高校生全体のえらんだ「五大スローガン」(表6の\*印)の中から、かくも分離選択するとは驚ろくべきことである。逆にいえば、「部落はどうしたら解放されるか。」という社会的判断と、「自分が部落民と思われたらどうするか。」という自己の生き方の選択とは、不可分に結びついていると認められる。

最後に、質問⑩の結果を掲げておく(表7)。「みな重要ではないか」という考えもあつたが、生徒はどう思っているかの意識実態を知りたかつたので敢えて、二つだけ選ばせた。

(表6) 高校生のえらぶ部落解放対策 (計200%中)

	生徒の「型」		
	全 体	解 放 型	否 定 ・ 逃 避 型
学校教育	*27	39	19
環境改善	*29	25	33
心がけ	7	5	12
運動	*40	57	31
放置	9	5	12
刑事罰	16	17	19
分散	*21	13	27
社会啓発	*28	29	23
絶望	9	2	12

(図11) 2つの類型の生徒グループがえらんだ3大施策



(表7) 他の重要な差別問題

選択肢 (2つえらぶ)	%
1. 女性差別	11
2. 障害者差別	57
3. 被爆者差別	6
4. 在日朝鮮人差別	26
5. 沖縄差別	1
6. アイヌ差別	1
7. 人種、民族差別	24
8. 学歴による差別	46
9. 職業による差別	20

昨年の場合と選択肢を変えたが、「改善」とはいえなかった。4の在日朝鮮人差別は7の人権・民族差別に流れるし、こちらからの働きかけがなくとも生徒が自分の問題として意識しやすい。学歴による差別一と、生徒に意識化させる事に同和教育の使命があるテーマとを並列的に並べたことは、分析に当っては留意を要する。「自分の問題としての学歴差別と比べてどの程度の身近さでとらえているか」という比較も出来ようがそれは苦しい弁明で、むしろ資料1の(註4)に掲げた昨年の分析と同様な見方が、なお成立つことを示すデータと考えるべきであろう。

むすび

府高同研が府下の高校の同和教育担当者たちの声をうけて、「標準性を備えたアンケート」を企画して二年、各校の実践例や義務制の先生方の意見をはじめとして、各方面から助言・御示唆を頂き、漸く定型化の見通しが立ったようである。府下全般の傾向はそう年々変わるものでもないであろうから、これからはこの二回の調査で判明した事から、次の手だてを考へる事がむしろ必要であろう。一次集計から帰納的に明らかにしている当面の私達のなすべき事については(註4、5)として昨年の考えを掲げておいたので、それらを参考にしたい。

今回の調査では、各学校現場の絶大な御協力を頂き、約一万五千名に及ぶ調査が行われた。また今回試みたクロス集計のために、約四、五〇〇枚(百クラス)の標本をマークシートに転記す

る労役、コンピュータ作業、上つて来たデータの解読、分析論理の点検と再計算等々、多数の方々の御協力を頂いた。ここに謝意を表して本報告のむすびとする。

- 文責 府高同研事務局 渡辺 宏介
- 協力 府立松原高校 高橋 峰和
- 府立柴島高校 関 友行
- 科学教育センター 青木 正仁
- 情報工学教室

資料1 前報告からの抜萃

註1、調査の意義目的について

このような高校生を対象とする部落問題に関する意識実態の調査は、従来は主に学校単位で行われて来ており、それぞれの学校に於ける部落解放の教育の課題を露見したり、方策を策定するのに役立って来た。自校の解放教育推進のための第一着手として、まず、アンケートを実施するという手順は、かなりひろく用いられている。

それぞれの学校で、生徒を身近かに知る教師が、その生徒に即してアンケートを立案実施する方が、その主体性、独自性のもつ意義は深いのであるが、各校の調査様式等の間に統一性が保たれない関係で、結果の分析・課題の検索等にも限界がある。

府高同研がこの調査を企画した理由の第一は、各高校現場が同和教育の自校の課題を検出しやすくするために比較の基準を提示する事であるが、統一様式で一万を超える標本数の調査結果が集

当面、生徒に対して「知っているか」と尋ねたからには、知らなかった生徒には教えてやるべきである。このような付随指導責任はもちろん起案者の府高同研にも及ぶ。現場ですぐ役立つ形態の手引の早急な配布が望まれる。

註5、他の差別問題の指導について

障害児問題が60%と突出したの、障害者自身の闘いの成果であり、解放教育の流れの反映であろう。

「在日朝鮮人問題」42%が、「人種(黒人)問題」43%に、また「女性差別」11%が「公害問題」24%に、それぞれ次いでいる。日本人にとって見えにくい朝鮮人差別や、男性にはもちろん女性にさえ見えにくくなっている女性差別を照射し、これ等の重要性を理解させる必要がある。国際人権規約の内外人平等を在日朝鮮人は未だ獲得していないし、婦人差別撤廃条約が男女別雇用、男女別教育を禁じているために、一時は署名すら見送ろうとしたほどにこの国の女性差別はひどいからである。何が差別であるかの判断力をつける事も大切な教育だから、国際的判断基準ともいえるべきこの二つの条約をしっかりと高校生に教える事は、先の⑦の高校同和教育への要望の中の理論的に、具体的にのどちらにもびつたりする対応策である。

回	答	%
1.	女性差別	11
2.	障害児問題	60
3.	公害問題	24
4.	在日朝鮮人問題	42
5.	沖縄問題	4
6.	スラム問題	4
7.	人権(黒人)問題	43
8.	その他	5

まったので、この目的は果せたのではないかと思う。このように一つの府県域全体の高校の部落問題意識実態調査がえられたのは、他に例のない事であるので、比較の基準は府下の高校に対してだけに限らず、他府県の部落解放教育研究のためにも役立つと思われる。

註2、調査の標準性について

試算の段階では学力の高い生徒群とそうでない生徒群との間、あるいは同和教育の活発な市の生徒群とそうでない生徒群との間には、それぞれ大きな偏差があるし、学校によって調査参加学級数が異なるので、単なる平均では全体を代表する数値にはならない。そんな訳で一時は高校生の平均像の一本化提示は出来ないのではないかとも思えたが、調査参加校の分布が全体に対してシミュレートされている(普通科校が全学区に及びいわゆる学校格差毎の校数対応がよい)ので学校毎に一旦百分率化して標本数比重を均等にしたものの平均値は、学力の偏差に関する標準性があると仮定できる。一方調査生徒の住所が府下全市町に亘っているので住所ブロック(大阪市五ブロックを含めて二九ブロック)別百分率の平均値は地域偏差に関する標準性があると考えられるのでその両者を算出し比較した所、各項目の%値に対して7%の範囲で一致した。つまりこのクロスチェックにより、前記の標準性の仮定は実証できたと考えてよい。そこでこれを全府高標準値とした。

註3、生徒の同和教育批判について

4「たてまえばかりで効果がないと思った」という、否定的感

想が39%と多い事に、まず注目したい。「効果が無い」という文句は、教育をうけた本人よりも、第三者にふさわしい表現だが、感性をゆり動かすような教育技術(それは言うは易く行うに至難ではあるが)の工夫が求められている事には間違いない。

「教師はよくやっているが効果はも一つ」というのか、「効果には疑問だがどちらかといえば良かった」というのか、いずれにせよたてまえを上から教えることになりがちな体質への警鐘を受けとめるべき数値である。

註4、部落問題知識の欠落に対して

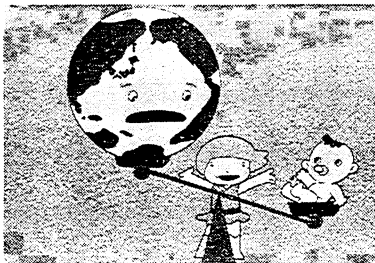
「西光万吉」、「オールロマンス事件」、「同対審答申」等、現代の部落解放運動の基礎知識を不十分のままにしておく事は、映画「橋のない川」のように部落の屈辱時代だけを印象づける事につながるからである。

自ら闘い取る部落解放運動の誇りを唱えた西光万吉、糺弾の対象を市民から差別行政へ転換させたオールロマンス事件の階級思想、資本主義憲法下での解放の展望を示し、国民の課題を鮮明にし、部落解放の運動を進展させる特となった同対審答申、とくにこの答申獲得までの闘いや答申の評価をめぐる論争等、部落解放運動の戦後史を高校生が知ってこそ、共に闘う決意が生れるのではなからうか。調査は明らかにこの部分の知識の落ち込みを示しているから、高校同和教育の新しい課題として、教師に解放運動の戦後史を教える力量が求められている。高校同和教育資料(府教委)の補強その他、しなければならぬ事がずい分と明らかになった。

社会啓発  
スライド



¥50,000 約30分  
4部構成(カラー)  
カセットテープ  
「学習の手引き」付



人の命は地球より重い(スライドの1シーン)

一切の差別撤廃、戦争反対をうたい、人権の世界憲法ともいえるべき「国際人権規約」。

この規約のつくられてきた歴史的背景、具体的内容、現実の人権問題の解決に果たす役割と意義をアニメ等でわかりやすく解説した人権学習の最適の教材。

(社)部落解放研究所

〒556 大阪市浪速区久保吉1-6-12  
電話 (06) 568-1300

1980年		※大阪市(成人)		1981年	
5. 宗教起源	1	3		5. 宗教起源	4
6. その他	5	1			
⑤ 知っている項目	1. 破戒	21	⑥	1. 破戒	26
	2. 橋のない川	11		2. 橋のない川	9
	3. 七分の一のいのち	17		3. 波染一揆	33
	4. 米騒動	67		4. 解放令	44
	5. 波染一揆	25		5. 全国水平社	32
	6. 解放令	34		6. 西光万吉	3
	7. 全国水平社	32		7. 松本治一郎	1
	8. 西光万吉	3		8. 同対審答申	4
	9. オールロマンス事件	2		9. 狭山事件	52
	10. 同対審答申	3		10. 地名総鑑	18
	11. 狭山事件	47			
	12. 地名総鑑	13			
その数	0個~3個	66	⑦ 同和の学習	1. ぜんぜん習わない	19
	4個~6個	27		2. 年に3~5回	47
	7個~9個	6		3. 1ヶ月に1回ぐらい	15
	10個~12個	1		4. 週に1回ぐらい	15
				5. 週に何回もあった	3
⑥ 同和の教育は(小)	1. 道徳	77	⑧ 「の使い分け」	1. そんな本知らない	3
	2. 社会	18		2. 配られたけど	28
	3. 国語	5		3. 1~2回使った	46
	4. 学活・ホームルーム	19		4. よく使った	23
	5. 学校行事にんげん	4			
⑥ 同和の教育は(中)	1. 道徳	41	⑨ 中学校で習ったもの	1. 部落の歴史・実態	45
	2. 社会	33		2. 原爆・平和	65
	3. 国語	6		3. 憲法と基本的人権	59
	4. 学活・ホームルーム	46		4. 部落解放運動の成果	29
	5. 学校行事にんげん	12		5. 狭山事件	27
⑥ 小に対する同和感想	1. もっと学びたい	9	⑩ 小に対する同和感想	1. もっと学びたかった	7
	2. 授業をうけてよかった	30		2. 授業をうけてよかった	26
	3. やりすぎだと思った	5		3. むつかしくてよく解らなかった	31
	4. たてまえばかり	39		4. 自分に関係ないと	6
	5. 自分には関係ない	4		5. たてまえばかりで反感	15
	6. 反感をもった	5		6. やりすぎだと思った	4
	7. その他	7		7. その他	10

資料2 1980年・1981年府高同研アンケート一次集計の比較

\*『大阪市民の「同和問題」に関する意識調査』(大阪市民同和対策部・1979年12月)

1980年		※大阪市(成人)		1981年		
① 初めて知った時期	1. 小学校入学前	2	4	① 初めて知った時期	1. 小学校入学前	1
	2. 小学校低学年	19			2. 小学校低学年	17
	3. 小学校高学年	48	32		3. 小学校高学年	46
	4. 中学時代	21	22		4. 中学時代	22
	5. 高校入学後	1	12		5. 中学卒業後	1
	6. おぼえていない	7	8		6. いつだかおぼえてない	11
	7. よく知らない	2			7. まだよく知らない	3
② 初めて知ったのは誰(何)から	1. 父	4	② 初めて知ったのは誰から	1. 父	2	
	2. 母	7		2. 母	5	
	3. 祖父・祖母	1		3. その他の家族	1	
	4. 兄・姉	1		4. 近所の人	0	
	5. 近所の人	1		5. 友人	5	
	6. 友人	9		6. 先生	57	
	7. 先生	55		7. テレビ	3	
	8. テレビ	5		8. 本	8	
	9. 本	9		9. 府や市の広報紙	0	
	10. 新聞	0		10. だれからともなく	16	
	11. 府や市の広報紙	2				
	12. ビラ	1				
	13. ポスター	1				
	14. 垂れ幕	1				
	15. その他	5				
③ その時の感想	1. 気の毒だと思った	36	③ その時の感想	1. 気の毒だと思った	27	
	2. びっくりした	17		2. ショックをうけた	6	
	3. いきどおりを感じた	7		3. 腹が立った	13	
	4. こわいと思った	6		4. こわい所だと思った	5	
	5. 何とも思わなかった	20		5. 関係ないと思った	7	
	6. しかたがないと思った	3		6. しかたないと思った	2	
	7. その他	9		7. よくわからなかった	40	
④ 今ではどう思うか			④ 今ではどう思うか	1. 自分に関係ない	4	
				2. 気の毒だがしかたない	8	
				3. 何とかしなければ	48	
				4. 将来はとりくみたい	3	
				5. まだよくわからない	29	
				6. その他	7	
④ 部落起源	1. 職業起源	15	38	④ 部落起源	1. 職業起源	20
	2. 政治支配の手段	57	28		2. 政治支配の手段	64
	3. 渡来人起源	16	10		3. 渡来人起源	7
	4. 落武者説	4	9		4. 落武者説	4

1980年			※ 大阪市 (成人)	1981年		
⑦ 高校への要 望 同和教育	1. 理論的にくわしく 2. 具体的・体験的に 3. 教科学習に力を 4. 社会科でやればよい 5. その他	15 31 8 15 27	↔	⑩ 高校への要 望 同和教育	1. 理論的にくわしく A. 部落の歴史 B. 部落の今の実態 C. 部落解放運動 2. 部落問題以外の人権問題 3. 教材の学習をしっかりと 4. いっさいやっほしくない	35 6 22 7 29 12 14
⑧ ク ラ ス ・ ク ラ ブ の 中 で	1. 部落の人が気の毒 2. 別に何とも 3. 部落の人をつい意識 4. 許せない 5. 部落の子の人柄次第 6. 同情し親しくする 7. わからない 8. その他	15 9 6 24 18 2 22 4	↔	⑩ 部 落 の 人 だ ら	1. 別の土地に行くなど 2. 部落でないことをわからず 3. 差別をなくす努力をする 4. わからない	3 22 25 36
⑨ 有 効 な 手 段 ( 2 つ 選 ぶ ) 差 別 意 識 を な く す の 選 ぶ	1. 学校の同和教育 2. 環境改善 3. 部落の人の努力 4. 解放運動・共闘 5. 自然解消 6. 法律で取締る 7. 分散 8. 大人を教育する 9. 何をやっても無駄 10. その他	20 27 9 28 11 12 20 43 12 10	↔	⑩ 部 落 差 別 を な く す の 選 ぶ ( 2 つ )	1. 学校の同和教育 2. 環境改善 3. 部落の人の努力 4. 解放運動・共闘 5. 自然に解消 6. 法律で取締る 7. 分散 8. 成人向け同和教育 9. 何をやっても無駄	27 29 7 40 9 16 21 28 9
⑩ 重 要 と 思 う 部 落 差 別 ( 2 つ )	1. 女性差別 2. 障害児問題 3. 公害問題 4. 在日朝鮮人問題 5. 沖縄問題 6. スラム問題 7. 人種(黒人)問題 8. その他	11 60 24 42 4 4 43 5	↔	⑩ 重 要 と 思 う 部 落 差 別 以 外 の 差 別 ( 2 つ )	1. 女性差別 2. 障害者差別 3. 被爆者差別 4. 在日朝鮮人差別 5. 沖縄差別 6. アイヌ差別 7. 人種・民族差別 8. 学歴による差別 9. 職業による差別	11 57 6 26 1 1 24 46 20